

水戸芸術館現代美術センター（CAC） ギャラリートーカー研修 レポート

森山純子

水戸芸術館現代美術センター 教育プログラムコーディネーター

◆水戸芸術館現代美術センター、CACギャラリートーカーの活動について

今回研修をお願いしたのは当館のボランティア、CACギャラリートーカー（以下トーカー）を中心にした、水戸芸術館の鑑賞ツアーのナビゲイターを担う層である。トーカーは1992年に発足した市民ボランティアで、来館者を対象に対話型の「ウィークエンドギャラリートーク」を行っている。

◆研修の位置づけと内容

トーカーに向けて集中的に研修を行う年がある。新メンバー募集のタイミングがそれで、2010年は6期生の募集があった。福さんによる対話式鑑賞の研修は、4期（2001）、5期（2006）に続き3回目だ。今回は伊達さんによるトークのスキルを検証する講義も加わった。「アートは作品と鑑賞者の間にある深遠で素晴らしいコミュニケーションである」という福さんのスタンスは一貫して変わらないが、ACOPが数年かけて積み上げてきた実践をより濃く反映した研修となった。参加者のレポートを引用しながら当日を振り返りたい。

①福さんによる講義

福さんの情熱的な語り口に皆1分で引き込まれる。アートは作品の中ではなく、人と作品の関係性の間にあることを、私たちの日常的な感情や動作と重ね、さまざまな切り口で話してくださった。中でも「わからないから」知りたいと思う恋愛対象とアートは似ているという話は、「わからないから」美術を敬遠する人たちも納得してくれるのでは？ という刺激的な話。美術館は知的ワンダーランドであるという話にも励まされる。

“「もうわかった！」はコミュニケーションの終わりである。”福さんのレクチャーの中で衝撃を受けた言葉のひとつです。早々と作品についてわかったと思うことは作品から得られる知的探求のきっかけを自ら放棄してしまうことを学びました。
(20代・学生)

②伊達さんによる講義

参加者が視聴してきたACOPの学生による対話式鑑賞の映像をポイントごとに止めて、具体的にどのような作業が行われているのかを検証しながら進められた。トーク

の段階的構成、スキルが伊達さんの明晰でわかりやすい解説によって理解できたように思う。

最初に映像を見た時は、流れるようなスムーズな対話進行に感心して見たが、そんな一見自然な対話でも、分析するとそのスムーズさを実現するために様々な配慮がなされていることに驚いた。相手の会話を引き出す話法を普段意識したことがなかったのも、具体的なポイントを知ることができて非常に良かった。

(30代・会社員)

③現代美術ギャラリーでの鑑賞演習

開催中の「クワイエット・アテンションズ」展に場所を移し、指定された作品の前で2名がナビゲイトをした。他の受講生は鑑賞者となった。展覧会オープンの翌日だったため、担当者は初めてみる作品を話す役を任せられ、大いに困惑したと思う。しかし戸惑いや失敗が検証材料となり、前の講義で学んだことを現場で経験できたように思う。

(もし自分がナビゲイトをして指導を受けていたなら) 聴き方、話し方、立ち振る舞い全てにおいて至らなさを実感したでしょう。そこから這い上がるには精神的にも技術的にも労力がかかると思いました。しかし、指導には厳しさの先への期待、鑑賞者の立場を守ってくれることを感じ、たいへん意義があったと思っています。

(20代・公務員)

◆最後に

トイレに立てこもって失神する学生もいた...というACOP。ここまで真摯に「言葉と他者」に向き合い、「場」を作る経験はなかなかないだろう。しかし、もしこの作業を獲得できたなら、それは「アート」を超えた生きる力となり、「アート」がその人の人生そのものに広がると感じる。一年かけて行っているACOPのカリキュラムを1日で学ぶのは難しい。しかし鑑賞のひとつのかたちを追及する研究の一端を垣間見られることは、トーカーにとって毎回たいへん貴重な体験である。

美術館が最前線にどのような人材を置くかで、展示以上に来館者の体験を左右することがある。オープンマインドで他者に接し、アートとともに過ごす人生の愉しみを他の人に伝える。そんなサポーター兼利用者が今回の受講層だ。福さんは今回もいたずらっ子のようなチャーミングな視線と真剣なまなざしで、「ちゃんとやってる？」と私たちの心を射抜き、これからの活動の中でも問いかけて続けてくれるだろう。またお二人と再会する機会を楽しみに、スタッフも含めて水戸美術館でのトークのあり方を探っていきたいと思う。